

色彩と光－演出効果を深読みする

Color and Light – Deep reading with effects

森友 令子

Reiko Moritomo

オフィス森友／大阪芸術大学 非常勤講師

OfficeMoritomo / Osaka University of Arts Part-time

キーワード：アニメーション、光の演出効果

Keywords: animation, light effects

1. はじめに

アニメーションにおいて色と光は、描かれている物体の質感だけでなく、世界観を構築する。色が、キャラクターの性格、役割などを端的に示すこともある。色調は、物語の連続性を保ち、心理的な変化を感じさせる。光は、時間や季節だけでなく、描かれる世界をリアルに見せ、観客の視線を誘導する。優れたライティングは、見ている者の気を散らすことなく、感情や意図を物語る。色彩と光の表現の質が高ければ高いほど作品への強い没入感を得られるだろう。

では、実際にどのように描かれているのか。ここでは、児童向けの劇場版アニメーション作品で描かれた色彩と光による演出効果について、ストーリーとキャラクターに沿って深読みしてみたい。

2. パウ・パトロール ザ・ムービー

『パウ・パトロール』(原題: PAW PATROL) は、カナダで制作された幼児向けテレビアニメーションで、2013年8月に北米で放送開始され、世界160以上の国と地域で放送されている。一人の少年と、様々なアイテムを搭載したビークルを操る5匹のオスと1匹のメス、計6匹の子犬が活躍するレスキュー・アクション・アドベンチャーだ。日本では、2019年4月より放送開始され、今現在も放送中だ。男児女児関係なく子どもたちに視聴されている。キャラクターグッズや玩具なども販売されている。視聴対象年齢は1歳から6歳までの未就学児のようだが、大人でも十分楽しめるようになっている。『パウ・パトロール ザ・ムービー』(原題: PAW PATROL: THE MOVIE) は、2021年制作の劇場版アニメーションである。本作は、パウ・パトロールを全く知らない者が観ても、物語に入り込めるようになっている。明確な対象年齢はないが、未就学児の映画館デビューの一つとしても最適といえよう。キャラクターや背景など、テレビ版に比べかなり作り込まれた作風となっており、色彩による表現も丁寧に描かれている。

3. キャラクターの色

まず、キャラクターに使われている色を整理する。

未就学児にも理解しやすく、キャラクターの色はシンプルにわかりやすくなっている。主人公の少年ケント(Ryder)は、普段はライフジャケット風のベストを着用しており、ベストにはコーラルレッドをメインに、クリーム色、水色の縁取り、黄色のラインが配色されている。アドベンチャーシティでは、ベストのデザインを元に、クリーム色をライトグレーにしたバイクジャケットを着用している。この配色は、基地であるパウ・タワーのイメージカラーでもある。パウ・パトロールの子犬たちは犬種にあわせ現実的な毛色に近しいが、それぞれにテーマカラーを持っている。本作の主役であるオスのジャーマンシェパードのチェイスは青、警察車両を担当している。オスのダルメシアンのマーシャルは赤、消防車両担当だ。オスのブルドックのラブルは黄、ブルドーザーを扱う。オスのミックス犬のロッキーは緑、清掃車を担当している。オスのラブラドルレトリバーのズーマはオレンジ、水陸両用車のホバークラフトを扱う。メスのコッカースパニエルのミックス、スカイはピンク、ヘリコプターを扱っている。本作のオリジナルキャラクターであるメスのダックスフント、リバティはサーモンピンクでスクーターが与えられている。彼らのライバルとなるライバル市長(Humdinger)は青紫だ。市長の手下である6匹の猫の首輪も青紫である。ボディガードのブッチとルーベンはダークグレイにくすんだ紫だ。印象的なヘアスタイルのニュースキャスター、マーティ・マックレーカーは水色である。トラブルの一因となるクラウドキャッチャーはオレンジで、開発者の科学者ケンドラは白衣の白である。他にも、動物、人間ともにユニークなキャラクターがいるが、明確なテーマカラーの印象はない。だが、未就学児にもわかりやすく、パウ・パトロールにとって好意的なキャラクターなどは差し色などで示している。

4. 舞台の色

本作は、物語られる舞台ごとに基調となる色味がある。このことにより、今ここはどこか、これからどこに向かうのかなど、視覚的にもわかりやすくなっている。

る。また、それぞれのシークエンスでの基調となる色が他のシークエンスに配色されることで、ストーリーの連続性が保たれている。

パウ・パトロールが住んでいるアドベンチャー・ベイは黄緑、海のエメラルドグリーンが印象的だ。パウ・タワーのイメージカラーもよく映えている。一方、事件が起こるアドベンチャーシティはライトブルーである。高層ビル群が立ち並んでいるが、ビルの窓ガラスやメタルカーテンウォールに空の青さが写り込んでおり、現実世界の都会よりも明るく温かみを帯びている。上層部分のライトグリーンが印象的だ。街中は大都市のなかに下町らしさもあり、暖色系と緑みで描かれている。ライバル市長が絡むシークエンスでは、紫が増える。影でさえ紫みを帯びる。チェイスが連れ去られた先の犬の刑務所(以前は犬のマナースクール)の外観は明るくイエローオーカーの壁面に笑顔の白い犬たちが描かれている。だが、内部の廊下は薄暗く、黄色の厚い扉に開閉を示す赤ランプ、照明の明かりなのか、青緑の光が反射してみえる通路と一見してここは、心地よくない場所だとわかるようになっている。部屋の中は、室内灯がつくと一転して明るくなる。中にいる犬たちは、敵ではないということだろう。他にも、さまざまな舞台が登場するが、それぞれイメージカラーが展開されている。

5. 光の演出効果

ここでは、ストーリーラインに沿って、チェイスの印象的なシークエンスを三つ取り上げ、光の演出効果についてみていきたい。本作の主演であるチェイスは、パウ・パトロールのリーダー的存在である。映画の導入では、橋の上で起きたトラック事故では、高いところも物ともせず、ワイヤー1本でトラック運転手を救出する。そんな彼がアドベンチャーシティからのSOSに対して「行かない」と拒否をする。なぜなら、彼は幼少期にアドベンチャーシティで辛い経験をしてきたからだ。一人(1匹)離れて落ち込んでいると、彼のもとへケントがやってくる。一つ目はここのシークエンスだ。落ち込んでいるチェイスは大きな木の根元に座って項垂れている。木陰のもっとも暗いところに座っており、日の光が当たっている周囲との明暗さがくっきりと描かれている。説得しにきたケントは陰に入るが、暗くはならない。ケントの前向きな言葉に伴い、チェイスにかかっていた影が薄まり明るくなる。ケントの言葉を信じようとするチェイスの心情の変化が光と陰影によって描かれているのだ。

次に取り上げるシークエンスは、パウ・パトローラーがアドベンチャーシティに到着した際のチェイスの描写だ。遠くに高層ビルが立ち並ぶ街が見えてくる。明るいベイの空とは異なり、曇天である。街に入ると、

チェイス以外のメンバーはケントの周りに集まり、目を輝かせてビル群を眺める。すると、ビルの合間から眩しい光が差し込んでくる。だが、遅れて見にきたチェイスにはビルの影が当たる。まるで影が彼を飲み込もうとしているようだ。ケントが大丈夫かと声をかけた瞬間、チェイスに光が当たるが、すぐさま影になる。車窓から見えるビル群には影が落ち灰みも強く見えている。ビルの合間に見える空や雲も暗い。チェイスの隠している不安を表すかのように、雨が降りだす。ここで、先にみた舞台の色が活かされている。ライトブルーの明るい街が曇天模様で暗く見えるのは当たり前だが、それ以上に暗く感じるのは、チェイス目線で描かれているからだろう。雨という物理的な表現と相まって、チェイスの不安を伝えている。その後も、影はチェイスの思いや感情を言葉以上に表している。三つ目のシークエンスは、一番わかりやすい。レスキュー中、チェイスは高層部で動けなくなる。仲間に助けられ地上に戻ると、メンバーに指示を出していたケントがチェイスを迎える。ケントは彼を心配し、休みを与えようとする。その時点では、ケントもチェイスも日に当たっている。だが、ケントに裏切られたと感じたチェイスは後退りし、影のなかに入り込む。するとチェイスは今まで我慢していた気持ちを吐露する。明るいところに立つケントとメンバーたちに対してビルの影のなかにいるチェイスのショットは、あからさまに感じるかもしれない。だが、この対比こそ、未就学児にチェイスのトラウマの深さと痛みを教えてくれる。仮に、台詞を聞きそびれたり、サブタイトルを読み損ねたりしても、光と影の表現を見るだけで、チェイスの感情がわかるようになっているのだ。

6. おわりに

本作は、未就学児対象の映画だ。だが、実際に見ていくと、色彩表現と光と陰影の描写は想像以上に細やかに描かれている。未就学児向けだからこそ、豊かな表現が求められるのだろう。

学生の作品だけでなく、商業作品でも、なぜその色を選んだのだろう、どうしてそのような光を描いたのだろう、または、なぜ描かなかったのだろうと疑問を感じることがある。おそらく、色や光を記号的に理解し、色や光による演出効果が感情表現でできることにまで意識がっていないのではないかな。もちろん、作風にあわせた色彩と光の描写であることは一番である。だが、そうであっても、色と光の扱いを疎かにして良いというわけではない。色や光が作品評価にも影響を及ぼしていることを忘れてはならないのだ。